社会学部論集　第36号（2003年3月）

新中国成立以前における社会学の中国化の提唱について

星　　明

〔抄　録〕

中国の社会学は，外国から輸入後ほぼ30年が経過した1930年に発展期に入った。1930年に全国規模の学術団体である中国社会学社が組織されると同時に，多くの社会学者が社会学の中国化に取り組んだ。中国化を提唱した代表人物である許仕廉と孫本文は理論的側面から，呉文藻は中国社会の実態把握という側面から，中国化を目指した。特に，呉文藻は社会学と機能主義人類学を結び付けることによって中国のコミュニティを研究し，中国化のための方法とした。日中全面戦争による大学や研究機関の西南への移動にもかかわらず，社会学者は雲南や四川で多くの調査研究を行なった。社会学と人類学との結合はB. K. マリノフスキが「現代中国社会学派」と称したように大きな成果を収めると同時に，後の中国社会学に大きな影響を与えた。この小論では，1930年代の中国社会学の中国化の提唱について考察した。

キーワード　中国化，社会学，呉文藻，孫本文，許仕廉

は　じ　め　に

この小論は旧中国における社会学の中国化の提唱について述べたものである。中国の社会学は2002年現在，すでに100年あまりの歴史をもっているが，そのうち旧中国の50年間の社会学は西洋の実証主義社会学が主要な地位を占めていた。さらに，その50年を区分すると，ほぼ1）1900年前後から1910年代の外国からの導入と国内の伝播の時期，2）1920年代末から30年代初めの中国社会及び中国農村の性質をめぐる論争のなかで，社会学がさまざまな角度から中国社会をどのように改造するかを論じ，実践した時期，3）1930年代から40年代の社会学と人類学を結び付けて，中国のコミュニティを研究した時期の三つに大きく分けられる。この小論では上の3）の時期を社会学の中国化の端緒とした。その理由はこの時期，多くの社会学者が社会学の中国化を目標としたからである。中国社会学の学史上の発展区分を行なっている論者は13人と多いが(1)，社会学の中国化を区分のメルクマールとして明確にあげて

いる論者は黄紹倫[2]，胡鴻保[3]，陳樹徳[4]の 3 人に過ぎない。そのいずれの論者も 1930 年ないし 31 年を社会学の中国化の始まりとしている。この 3）の時期は，1931 年 9 月 18 日の柳条湖事件に始まって，1937 年 7 月 7 日の盧溝橋事件を契機とする日中の全面戦争の時代を含んでいるが，この戦争は北京の北京大学，清華大学，天津の南開大学を，湖南省長沙（国立長沙臨時大学を設置）を経て雲南省昆明（国立西南連合大学を設置）[5]に移動せざるを得ない状況をつくり[6]，同時に全国規模の学会である中国社会学社の活動を停止させ（年次大会が 1937 年 1 月から 1943 年 2 月まで 6 年間中断）[7]，その刊行物『社会学刊』も停刊に追い込んだ[8]。また，燕京大学社会学部発行の『社会学界』も停刊に追い込まれている。

この小論でいうところの社会学の中国化とは，当該社会の多くの社会学者が社会学の方法，対象，理論，実践をその社会の社会的・歴史的背景や社会的課題に結び付けることを，その程度の差はあれ，意識的に行なっており，それが顕在化しているばあいをいう[9][10]。

ここでは上の 3）の時期の初期に中国化を提唱し，その後の中国社会学の中国化の大きな流れをつくった 3 人の社会学者の議論について考えてみたい。

1．社会学の中国化の提唱（その 1）－許仕廉と孫本文のばあい－

中国で社会学の中国化を最初に提唱したのは，鄭杭生らによれば許仕廉（1896 年－卒年不詳）が最初であるとされる[11]。かれは若くしてアメリカに留学し，アイオワ大学で哲学博士の学位を獲得している。1924 年に帰国後は，前後して国立武昌師範大学の教授，燕京大学社会学部教授及び主任などの職に就いた。燕京大学の社会学部は 1922 年に設置され，当初はアメリカの J. S. バージェスが主任であったが，1926 年に許が引き継いだ[12]。許は，1925 年の論文のなかで当時の中国社会学が欧米社会学のコピーであるという欠点を指摘し，次になぜコピーがいけないかの理由を二つあげている。その一つは産業化した社会といまだ手工業の中国との社会問題は同じではないこと，他の一つは西洋人と東洋人とは性情が異なるので生じる社会問題にも差違があることをあげている。さらに，中国化のために中国の材料を収集する方法として，次の八つをあげている[13]。①できる限り，大学教員の価値のある講義を刊行して多くの人の使用に供すること，②大学に社会学研究科（専門）を設置し，ある程度の専門知識をもつ学生に「実地考察」をさせること，③各都市や各町村に「社会調査所」を設置し，その地域の社会状態を調査すること，④各商工団体，宗教団体は経費を惜しまず出して，社会調査を重視すべきであること，⑤北京政府は「社会調査局」を設置すべきであること，⑥社会サーヴィス運動を提唱し，慈善サーヴィス機関を増設すること，⑦専門研究所を設立して，中国古代の社会思想，社会状態及び社会史を研究すること。そして，分散している材料を整理し，記録すること，⑧工業調査と経済調査を提唱することである。

このように許仕廉は当時の中国の社会学の欠点，その問題点や社会学の中国化のための方法

について提唱しているが，それを実践のかたちで展開していない。しかし，中国の社会学が欧米の社会学に依存していることに対する単なる心理的不満から一歩進んで，具体的に中国化の方法までを提唱したことは高く評価されるべきであろう。

つぎに当時，もっとも活動的で，影響力のあった孫本文の社会学の中国化の提唱について触れたい。中国社会学史の著書をもつ韓明謨によれば，孫本文は「解放前のわが国の社会学界にもっとも影響を与えた社会学者であり，もっとも多い著作をもつ社会学者である」としているし(14)，A. インケルスも新中国成立後の間もない時期に，中国共産党政権が社会学者に対してとった処遇を述べた際に，孫本文に言及している(15)。孫は北京大学卒業後，アメリカに留学し，イリノイ大学から修士，ニューヨーク大学で博士号を獲得した。1926年帰国後，前後して復旦大学で教職に就き，中央大学社会学部教授，そしてそこで長期にわたって主任を務めた。かれは上海を中心にした東南社会学会の設立（1928年），そしてそれを全国規模に発展させた中国社会学社の設立（1930年）の中心人物である。

孫は，1931年2月に開催された中国社会学社の第1回の年次大会で，「中国社会学之過去現在及将来」(16)という講演を行なった。その講演のなかで，孫は1931年にはすでに，中国の社会学は萌芽期（初めて社会学が輸入されてから清末期まで），建設時期（1911年の辛亥革命から1930年の中国社会学社の成立まで）を経て進展時期（中国社会学社の成立から始まり，現在は進展時期の始まり）に入ったと述べ，今後中国の社会学がなすべきこととして次の5項目をあげた(17)。すなわち，①基本工作の進行，②実際の問題の研究，③各大学の分業合作，④全国の人材の集中，⑤大学生のなかの秀れた学生の訓練である。そして，つぎにこの①の内容をさらに四つあげている。つまり，①世界の社会学の名著及び欧米の重要な学説や方法を系統的に紹介すること，ならびに訳語をはっきりと定めること，社会学辞典を編纂すること，大学の社会学教科書及び参考図書を編纂すること，②中国固有の社会学の史料を整理すること。中国の旧籍のなかには非常に豊富な社会学の資料が含まれているので，社会現象或いは社会問題に関する先人のさまざまな思想について整理しなければならないこと，系統的な中国社会思想史を編成して，文物制度に関する各種の資料を整理して，中国社会制度史或いは中国発明史を編纂し，参照に供すること，③中国社会の特徴の実地研究をすること，これは主に中国の各地の重要な文化地区について，適切に系統的な実地調査を実施して，人々に中国の社会や文化に対して正当な認識をもたせるようにすること，④中国化した社会学を建設することである。

ここからわかるように，孫は段階を踏んで中国の社会学の中国化を考えていた。実際，かれは英語のタームを中国語訳するばあいの統一を呼びかけ，その実際の訳を雑誌に掲載している(18)。孫が考える社会学の中国化の基本点な視点は，欧米の社会学の方法を採用して，欧米の社会学者の精緻で，有効な原理や理論に基づいて，中国固有の社会思想や社会制度を整理することである。その上で，全国社会の実際の状況に基づいて，系統的，組織的に中国の社会学

に総合し，完成させるということになろう。

さらに，孫本文は1947年に「中国社会学者今後努力方向之商権」(19)のなかで，社会学の中国化をより体系的に述べている。資料的価値もあるので，ここで全文を訳出しておきたい。

中国社会学者今後努力方向之商権（議論）（孫本文）

社会学は一つの科学である。元来，中国固有のものではなく，中国に輸入されてから50年足らずであり，初期の輸入から，進歩は緩慢である。発展時期に入ってからも20年余りしかたっていない。しかし，この短い期間にも社会学は相当の進歩を遂げた。すでに社会学を学び研究した者はおおよそ1000名余りあり，著名大学で社会学部があるところは18校に達したし，翻訳本及び著書も600冊以上になった。しかしながら，実際には，欧米各国にはるかに落伍している。いかにしてこの既存の基礎を固めて，成長発展を加速させることができるか。全国のわれわれ社会学者の分業協力，共同の努力を待たなければならない。そこで，今後われわれ社会学界が努力すべき方向を提示し，同人と論議をしたい。

第1．中国の理論社会学の樹立・・・今後，社会学者は中国化の社会学の樹立に力を注ぐべきである。そのための重要な活動はつぎの3点である。

1．中国固有の社会史料を整理すること・・・わが国の旧籍のなかには極めて豊富な社会学の資料がある。その資料研究にはつぎの5点がある。

（1）社会学説に関して・・・社会生活あるいは社会問題についての古人のさまざまな思想を収集し，整理し，それを年代順に整理し，系統的な中国社会思想史を編集する。

（2）社会的理想に関して・・・古今の賢者が発表した社会組織及び社会生活のさまざまな思想と計画を収集し，整理し，中国社会理想史を編集する。

（3）社会制度に関して・・・歴代の社会制度の性質，機能，状況や変遷及びそれらの相互関係を分析し，各種の社会制度を編集する。

（4）社会運動に関して・・・歴代の社会運動の性質，起源，範囲及びその社会に与える影響などを分析，整理して，社会運動史を編集する。

（5）一般的な社会的行為に関して・・・歴代の偉人や賢人が発表した立派な言行で社会学あるいは社会心理学の参考と裏づけに供することができるものは極めて豊富なので，これらを分別して収集し，社会の類書を編集して，採用に供する。

2．中国社会の特徴を実地に研究すること・・・歴史の材料を整理し，わが国の社会の性質の研究に供する以外に，なお現実社会の方面から，詳細で精密な調査と研究を行ない，それをもってわが国の社会的特性を徹底して理解する。ゆえに，今後各地の重要な区域を，計画性をもって都市と農村の調査を行ない，各種の調査研究報告を編集し，各

方面の参考に供する。

3．社会学の基本的図書を系統的に編集すること。わが国の社会学はすでに40年の歴史をもつが，社会学理論と応用に関する比較的完全な書籍はまだ多くない。また若干の部門の大学の教科書としてもなおどれも充分でない。例えば，西洋社会思想史，中国社会思想史，近代社会学理論，中国社会発展史，社会制度，民族学，都市社会学，社会学研究方法，社会行政，社会政策，社会立法，近代社会運動などは少数の翻訳本以外に，いまだ中国人自身が書いた適当な参考書がない。ゆえに，基本的図書を編集することは実際に急を要する。

上の3方面の仕事から，われわれは中国固有の社会材料を充分に収集し，整理することができる。さらに欧米の社会学者の綿密な理論に基づいて，完全に中国化した社会学体系を創建することを希望する。

第2．中国の応用社会学の樹立・・・同時に中国の国情に適合した応用社会学の建設に従事すべきである。その重要な活動は次の3点である。

1．中国の社会問題を詳細に研究すること・・・すでにこれまでの，わが国の社会学の文献のなかでは，社会問題の類がもっとも多い。しかし，この書物の大部分は西洋の社会問題を論じており，中国の社会問題を専門に論じているものはなはだ少ない。今後，全国の社会学者はその得意とするところに合わせて，さまざまな比較的範囲の限られた問題に対して，詳細な研究を行ない，それによってわが国の社会問題の特質を徹底的に理解する。

2．中国の社会事業と社会行政の検討を強めること・・・わが国の社会学者は従来，社会事業と社会行政の研究を重視してこなかったことはいうまでもないだろう。社会部が設置されたのちに，一般の社会学者の注意を引くようになった。今後，一部の適当な社会学者が専門にこの方面に努力し，それをもってわが国の社会事業と社会行政の実際の状況，及びその可能な発展の方向を研究する。

3．中国社会の建設の方案を本腰を入れて研究すること・・・今後，全国の社会学者は上述した社会問題，社会事業及び社会行政の材料に基づき，社会組織，社会福祉，社会サーヴィス運動の各方面から，当面の，そして今後の全国の需要を詳細に分析し，各種の社会改革の方案を周到に立案する。もって政府の参考に供する。

上の3方面の努力をとおして，今後社会学者は社会学理論とわが国の社会的事実に基づいて，中国社会の需要に適合した応用社会学を創建することができるし，それによって，国家民族の向上発展を促進することを希望する。

第3．社会学の人材を養成すること・・・わが国の社会学者の大多数は全国の大学に集中しており，各行政機関にいる者は極めて少数である。近年，大学の課程が多くなり，社会事業が発展してきたので，人材がことのほか不足している。われわれは政府が成績

の優秀な青年社会学を選抜して外国に派遣して研鑽させることを希望する。同時に，国内の比較的充実した大学の社会学部は，今後すみやかに青年社会学者を育て，各専門に応じて，全国の切迫した需要に応じる。このようにできれば，中国の社会学の前途は無限の希望があろう。

以上，許仕廉と孫本文の社会学の中国化の提唱について簡単にみてきたが，この二人に共通するところはいずれもアメリカ留学の経験者であったこと，そしていずれもどちらかといえば中国化の理論的側面の強調，または中国化の提唱におわり，それを全面的な運動のかたちにまで結び付けなかったことである。

これに対して，つぎにあげる呉文藻はあらゆる方法で，社会学の中国化を全面的な運動のかたちで展開した人物である。

2．社会学の中国化の提唱（その 2）－呉文藻のばあい－

社会学の中国化に最初に，かつ確実に後に続くかたちで貢献した人物は呉文藻（1901～1985）である。かれは北京の清華学校（清華大学の前身）を 1923 年に卒業後，アメリカに留学し，ダートマス大学社会学部で学士，コロンビア大学で修士（修士論文題目「孫逸仙的三民主義学説」），博士（博士論文題目「イギリスの世論と行動にみる中国のアヘン問題」）の学位を取得している[20]。そして，学位獲得後，1929 年に中国北京に帰国し，1929 年から 1938 年まで北京の燕京大学社会学部で教職につき，1938 年雲南大学に異動した[21]。1937 年，日本軍の北京侵入，華北の占領は，呉文藻の教育と研究計画に重大な挫折をもたらした[22]。燕京大学はアメリカの教会立の大学なので，日米の開戦前は継続することができたが，呉は 1938 年夏に一家を挙げて昆明に移った。1939 年には，雲南大学で社会学部を立ち上げ，学部主任になっている。また，同年，燕京大学の委託を受けて，昆明に燕京大学と雲南大学が共同で実地調査ステーションを設置した。しかし，この調査ステーションは日本軍の空爆を避けるために，呈貢城郊外の魁星閣（後に「魁閣」と称せられるようになった）に移った。1940 年末，ある人が陰で邪魔をして呉文藻を非常に困難な立場に落とし入れたので，かれは清華の同窓の勧めで，やむをえず昆明をはなれて重慶の国防最高委員会参事室で仕事に就いた。その後，この魁閣での活動は費孝通に引き継がれた。日本の投降後は，このステーションは昆明に戻ったが，費孝通や張之洞が雲南を離れたので，1948 年に活動を中止した。しかし，この実地調査ステーションは呉文藻が中国社会学の中国化を推進した重要な運動になり，中国の社会学と人類学の発展史の上で重要な形跡を残した。

上は，呉文藻のごく簡単な略歴であるが，このなかに，かれが社会学の中国化を提唱するベースがある。それはアメリカ留学である。これがかれを社会学と人類学を結合さて社会学の中

国化の特徴にさせたのである。コロンビア大学の大学院ではF. H. ギディングスから実証主義を学んだ。その他にも，呉文藻はギディングスの弟子のW. F. オグバーン，F. ボアズ，その弟子のR. ベネディクトからも学んでいる。総じていえることは，これらはすべて呉文藻が社会学と人類学を結合させて研究するという，かれのその後の研究の方向に大きな影響を与えたことである。

また，後にかれはアメリカ留学で指導を受けた学者を中国の燕京大学の講義に招待することによっても，社会学の中国化に大きな流れを作った。例えば，1952年にはシカゴ学派のP. E. パークを，1935年10月には，日本で講義を行なっていた機能主義人類学者のラドクリフ-ブラウンを燕京大学社会学部に招聘している。そこで，3カ月間，ラドクリフ-ブラウンは比較社会学，社会学研究などの講座をもった。燕京大学社会学部を中心として，中国の社会学者はこのシカゴ学派社会学と機能主義人類学の理論と方法を結合させ，中国の特徴をもった学風を作り，中国の多くの民族やコミュニティの研究を進めた。これらは文化人類学者B. K. マリノフスキをして「現代中国社会学派」と称させた(23)。さらに，呉文藻は将来の有望な学生をこれらの外国人学者のもとや外国の大学に留学させることをサポートすることによっても社会学の流れを作った。例えば，李安宅はカリフォルニア大学バークレー校のA. L. クローバーとR. H. ローウィ（F. ボアズの弟子）のもとへ，後にまたイェール大学のE. サピーア（人類学・言語学者）のもとへ，林耀華はハーヴァード大学人類学部へ，費孝通はイギリスのロンドン・エコノミックスクールへ行き，マリノフスキの弟子になった。黄迪去はアメリカのシカゴ大学へ，瞿同祖と馮家升のアメリカ留学を按配している(24)。呉文藻は自伝のなかで，「当時，私はどの学生を，どこの国へ，どこの学校へ，誰を師として，どの学派の理論と方法を吸収させるかなどの問題をすべて学部の必要に基づいて具体的に，的を得た按配を大体行なった。・・・確実に比較的よい結果を得ることができた。かれらはすべて帰国後，研究や教育の任務を十分に果たしたし，後には本人の努力でみんなが専門の主力になった」と述べている(25)。

呉は，アメリカから帰国後，中国の社会学部の教材が欧米の社会学のコピーであることに大いに不満をもった。このことは社会学の中国化を提唱する大きな心理的動機になったことに違いないと思われる。かれは，「当時，中国の社会学はまだ西洋の社会学モデルの模倣とコピーの状態であった。大学が開設している社会学課程の内容は基本的に欧米の文献のまる写しであった。ある大学は教員も教材もすべて欧米のものもあった。中国の特徴をもつ社会学がないということは，ひとまず置いても，中国の社会の実際と結び付けて研究や教育を行なっている者は非常に少なかった」と述べている(26)(27)。

呉文藻は，国外の社会学者の招聘や学生の外国留学といった社会学を取り巻く周辺的な活動を積極的に行なうとともに，多くの中国化に関する論考を書いている。かれは「仮説をもってはじめ，実際の検証をもって終わる。理論は事実に符合し，事実は理論を啓発する。理論と事

実が融合することによって，新たな総合が獲得されねばならない。それによって現実の社会学は中国の土壌に根付くことができる。また，このような考え方で訓練された独立した科学的人材による，独立した科学研究を進めることで，社会学は徹底して中国化するといえる」と述べている(28)。これは，従来の多くの記述中心型の調査から抜け出ることを意図している。そして，かれは「社会学の理論と方法を文化人類学あるいは社会人類学と結合させて，中国のコミュニティ研究を進める。このやり方がわが国の国情にもっとも合致している」と述べている(29)。かれは自分が提唱する中国化をコミュニティ研究の実行によって図ろうとしたのである。

また，「・・・中国の社会学者の目下のもっとも重要な活動の一つは，早急に現在のコミュニティの実地研究を計画的に行なうことである。・・・民族学者は辺境の部落コミュニティあるいは植民地コミュニティを考察し，農村社会学者は内陸の農村コミュニティあるいは移民コミュニティを研究し，都市社会学者は沿海あるいは沿江の都市コミュニティ，ひいては海外の華僑コミュニティを考察する。みんなが同一の生態的あるいは文化的な観点と方法を用いて，各地でさまざまなコミュニティ研究を手分けして行なうことで中国のコミュニティ社会学の基礎を樹立する」とコミュニティ研究について具体的に述べている(30)。

これらの具体的な成果は，1943 年から 1948 年までに，かれが主編となった社会学叢書(31)として結実している。これらの著作は呉文藻が社会学の中国化のために，外国の学者を中国に招聘したり，次世代の社会学者を養成したことの成果でもある。

社会学叢書（呉文藻主編）

甲集（理論，方法論，社会制度）

第 1 種：B. K. マリノフスキ著，費孝通訳，文化論，付呉文藻著，論文化表格，1944 年，商務印書館出版

第 2 種：張東蓀著，知識与文化，1946 年，商務印書館出版

第 3 種：R. W. ファース著，費孝通訳，人文類型，1944 年，商務印書館出版

第 4 種：費孝通著，生育制度，1947 年，商務印書館出版

第 5 種：瞿同祖著，中国法律与中国社会，1947 年，商務印書館出版

乙集（コミュニティ実地調査報告）

第 1 種：費孝通著，禄村農田，1943 年，商務印書館出版

第 2 種：張子毅（即張之毅）著，易村手工業，1943 年，商務印書館出版

第 3 種：史国衡著，昆廠労工，1946 年，商務印書館出版

第 4 種：田汝康著，芒市辺民的擺，1946 年，商務印書館出版

第 5 種：林耀華著，凉山彝家，1947 年，商務印書館出版

こういった研究方法の背景には，人類学のラドグリフ-ブラウンからの非常に大きな影響がある。先に述べたように，ラドグリフ-ブラウンは燕京大学で短期の比較社会学と社会学研究の講義を行なうとともに，武漢，南京，上海，広州を視察している。かれは燕京大学での講演「対於中国郷村生活社会学調査的建議」(32)のなかで，次のように具体的に中国での調査方法を提案している。すなわち，1）機能主義の方法は比較的未発展の民族の小さく，かつ隔離されたコミュニティに有効であるので，中国のような大きく，かつ複雑な社会をみるばあいは多くの困難がある。だから，省，県，鎮，村，戸から構成された一つの集体とみること，2）つまり，このようにみると中国は世界コミュニティの一つである。中国では郷村をユニットとして調査を開始することがもっとも相応しい。というのも，大部分の中国人はこの郷村に暮らしており，また郷村は一つのコミュニティであることを満たしている。1～2名の調査員が1～2年以内に正確で詳しい研究を完成させるチャンスがある。3）一つのまとまった郷村コミュニティについて横ないし同時的研究，郷村コミュニティと外部との関係，縦ないし連続的研究を行なうことである。

このラドクリフーブラウンの提案した内容を呉文藻は全面的に受け入れて次のように述べている(33)。機能主義人類学の方法，特にその比較法を中国に応用する時，必ず先に簡単な社会の研究から着手する，つまり辺境あるいは内地の村落コミュニティを研究の起点とする。そのばあい，特に漢族の農村生活の研究を重視すべきである。中国で機能主義の実地研究をすすめる時，村落がもっとも適切な研究ユニットである。その理由は，大多数の中国人は一生を村落のなかで生活しているし，かつ村落は面積が比較的狭いコミュニティであるので，1～2名の調査員が1～2年以内に正確で詳しい研究を完成させるのに極めて都合がいいからである。中国の村落コミュニティに対して，徹底した考察は3種類の研究，つまり横あるいは同時的研究（以前静態研究あるいはモデル研究と称した），村落コミュニティの外部関係の研究，及び縦ないし連続的研究（以前動態研究あるいは変異調査と称した）を含む。

上の論述から，呉文藻がいかにラドクリフーブラウンの機能主義人類学を信頼していたかがわかるであろう。そして，呉文藻はさらに詳細に，具体的な中国の村落コミュニティの研究内容を次のように列記している(34)。1）家族，氏族及び親族の制度，2）村落コミュニティの技術制度，3）村落生活の経済方面，4）社会的サクション，これは法律，道徳，みんなの意志及び倫理的・宗教的サクションなどを含む。5）儀礼と習俗，例えば神社仏閣，節気及び誕生，婚姻，葬儀の祭りの風俗，6）話しことばと文字の社会的意味（特に，社会・文化との関係），7）教育，すなわち個人の社会化の過程，8）宗教，神話，芸術及び民間文学（すなわち，国内で一般にいわれる民俗学の領域），9）変化する社会環境のなかでの個人の社会的適応の問題，10）民族の思想と情操の研究，例えば国民精神，民族精神，民族の人品と徳性などである。

呉文藻は基本的に外国の社会調査方法，すなわち機能主義学派の調査法をいかに中国で応用

するかを探求したといえる。

お わ り に

中国では，一つの外来の学問が輸入された30年が経って，中国化の要求が出てきた。外国の社会学のコピーに対する不満，自分の国の社会学がないという心理的な不満が動機にあることは間違いない。そこでは，本国の社会学を建設すること，本国の社会の状況を知ること，本国の社会問題を解決することが大きな目標となる。いまからいえば，その中国化の方向は内向的であった。それは当時の世界の社会学の発展段階，つまり1960年代の世界の社会学のオーソドックスな構造＝機能主義社会学に対する懐疑から1970年代のパラダイム変換への潮流がいまだなかったからである。また，当時の中国のおかれた歴史的な状況のもとでは一つの帰結であった。例えば，日中全面戦争は大学と研究機関を西南部に移動させ，社会学者はその地域の調査研究をすることによって，中国社会学のアイデンティティを確立していった。

いま，各国の社会学の本土化は外向性を指向しているが，ここでは，いわば中国社会学の本土化（中国化）の初期の段階を扱ったわけである。

〔注〕

⑴　星明，1995年，中国と台湾の社会学史，行路社，pp. 5–10。

⑵　Wong Siu–lun（黄紹倫），1979, *Sociology and Socialism in Contemporary China,* RKP, pp. 4–62.

⑶　胡鴻保，1987年，中国社会学的発展過程，鄭杭生主編，社会学概論新編，中国人民大学出版社，pp. 541–586。

⑷　陳樹徳，1989年，近年来中国社会学史研究概述，中国社会科学院社会学研究所編，中国社会学年鑑－1979～1989－，中国大百科全書出版社，p. 90。

⑸　国立西南連合大学歴史簡介（インターネット版）。1937年の「七・七」盧溝橋事件から間もなく，北京，南京が日本に占領された。北京大学，清華大学，南開大学は追いつめられて長沙に逃れ，そこで長沙臨時大学（略称：臨大）をつくったが，長くは続かなかった。12月13日，南京が陥落して，武漢を揺るがした。戦禍が長沙に及ぶ危険があったので，臨大は再び，昆明に移動することを決定した。この他にも，四川省の重慶へは中央大学社会学部，復旦大学社会学部，郷村建設学院社会学部，社会教育学院社会事業行政系が，成都へは金陵大学社会学部，金陵女子文理学院社会学部，斉魯大学歴史社会学部，燕京大学社会学部が移動している（趙喜順，1995年，抗戦時期的四川社会学，西南民族学院学報：哲社版（成都），p. 160）。

⑹　王康著，星明訳，1997年，社会学を語る，佛教大学社会学部論集，第30号，pp. 209–214。筆者は，1996年8月22日，かつてこの時期を経験した社会学者で，中国社会学会理事の王康にインタヴューをした時に，かれは研究というよりも，日本軍の爆撃から逃げるので精一杯であったと，語った。

⑺　中国社会学社概況，1948年，中国社会学社，中国社会学訊（中国社会学社20周年紀念暨第9届年会特刊），第8期，p. 8。

⑻　孫本文，1948年，復刊詞，社会学刊，第6巻合刊，中国社会学社。

⑼ 鄭杭生・王万俊著，2000年，二十世紀中国的社会学本土化，北京党建読物出版社，pp. 24–30。鄭杭生らは本土化の類型を，その展開の方法によって「運動型」と「非運動型」に，またその成果の形によって「理論問題研究型」，「本土社会認識型」，「本土社会問題解決型」，「修正－創新型」に分けているが，それによればこの小論で扱った許仕廉，孫本文及び呉文藻は展開の方法はいずれも「運動型」で，成果の形で許仕廉，孫本文の2人が「理論問題研究型」，呉文藻は「本土社会認識型」に分類できよう。

⑽ 鄭杭生・劉精明・馮仕政，2001年，社会学理論研究的回顧与瞻望，跨世紀中国社会学－回顧与瞻望，中国人民大学出版社，pp. 43–44。鄭杭生らは社会学の本土化の定義には次のいくつかの種類があるいう。①外来の社会学の合理的な部分を本土の社会の実際と結びつけて，本土の特色をもつ社会学理論や方法論の学術活動や学術実現を形成するというもの（鄭杭生・王万俊著，2000年，前掲書，p. 7），②社会学理論や観点を特定の国家の文化的伝統と融合させる過程のなかで，その成功のしるしは特定の文化特性を備えた社会学理論と方法の形成であるというもの（張明，1994年，社会学中国化的主要任務和発展趨勢，蘇州大学学報（哲学版），4期），③研究者が研究に携わる時の考え方の本土化，つまり研究者が次第に自己の文化の伝統を現代中国人の社会心理現象や行為の枠組みを考えに組み入れていく過程をさすというもの（楊中芳，1999年，現代化，全球化与本土化是対立的嗎－試論現代化研究的本土化－，社会学研究，第1期，中国社会科学院社会学研究所，p. 57），その他として，中国大陸の社会学は一貫して欧米の社会学とマルクス主義の影響を受けてきたが，近年来の本土化の努力は一種の文化的アイデンティティの自覚を反映しているという金耀基の論述をあげている（金耀基，1998年，現代性論辨与中国社会学之定位，北京大学学報（哲学版），第6期，pp. 91–99）。金は，S. ハンチントンの文明の衝突のなかの，非西洋社会は一定近代化が進めば西洋社会型とは別類型の近代化類型を求めるという論議を引用しながら，本土化はアジア人の近代化過程のなかで表わした文化的アイデンティティであるという。金耀基はかつても，中国化の意味は中国での社会学者の知識上の自覚と反省であると述べている（蕭新煌著，1986年，星明訳，1995年，台湾の社会学－「伝統」の失墜から「中国化」の展望へ－，中国と台湾の社会学史，行路社，p. 170）。この小論では，旧中国の社会学の中国化を扱ったので，本土化のベクトルが内に向いている時のものである。例えば，ドイツのフランクフルト学派が戦後ドイツの経験を世界の社会学に溶け込ましたように，世界の社会学の復興という外へのベクトルの強調は1980年代まで待つことになった。

⑾ 鄭杭生・王万俊著，2000年，前掲書，p. 118。

⑿ 楊雅彬・王康，1991年，中国社会学史，中国大百科全書（社会学），中国大百科全書出版社，pp. 489–497。

⒀ 許仕廉，1925年，対于社会学教程的研究，社会学雑誌，第2巻第4号。但し，ここでは鄭杭生・王万俊著，2000年，前掲書，p. 119から再引用した。

⒁ 韓明謨，1987年，中国社会学史，天津人民出版社，p. 209。なお，孫本文の社会学原理（1935年初版，1944年増訂版上下2冊）は，民国期の部定大学用書本である。

⒂ A. インケルス著，1964年，辻村明訳，1967年，社会学とは何か，至誠堂，pp. 204–205。

⒃ 孫本文，1932年，中国社会学之過去現在及将来－中国社会学社第1次年会演詞，中国社会学社編輯，中国人口問題，8月版。ここでは，陳樹徳・許妙発編，1986年，中国社会学史資料選編（上冊），上海大学文学院（社会学専業教学用書），pp. 197–212から転載。

⒄ 孫本文，1932年，同上，pp. 1–20。ここでは，鄭杭生・王万俊著，2000年，前掲書，pp. 121–122から再引用。

⒅ 孫本文，1930年，社会学名詞漢訳商榷，東南社会学会，社会学刊，第1巻第3期，商榷pp. 1–18。

⒆ 孫本文，1947年，中国社会学者今後努力方向之商榷，中国社会学社，中国社会学訊（中国社会学社第8届年会特刊），第5期，pp. 1–2。

⑳ 袁方主編，1999 年，社会学百年，北京出版社，p. 149。

㉑ 呉文藻の生涯については，袁方主編，1999 年，同上書，pp. 149–164 以外にも，中国大百科全書編集編，1991 年，中国大百科全書（社会学），中国大百科全書出版社に詳細が記されている。かれは 1946 年から 1950 年まで国民党政府の連合国駐日代表団文化専門委員として（中国社会学社，1947 年，中国社会学訊，創刊号，p. 6）として日本に滞在（国民党の政策に次第に不満をもち，1950 年に代表団を辞職）。続いて 1950 年から 1951 年までシンガポールの星檳日報の記者の資格で日本に滞在している。そして，1951 年アメリカのイェール大学の招請を機会に日本を離れたが，アメリカには渡らず香港を経て，北京に戻った。そして，1985 年に亡くなるまで中央民族学院で仕事をしている。日本では，鶴見和子がその著のなかで，呉景藻について触れている（柳田国男，平野義太郎，川島武宜，仁井田陞，鶴見和子，1997 年，「比較社会学」日本と中国－林耀華著『金の翼』を中心として，鶴見和子憂茶羅 I，藤原書店，p. 336 及び「鶴見和子」年譜，1999 年，鶴見和子蔓茶羅 IV，藤原書店，p. 376）。しかし，年譜の記述にある「この頃（1952 年），友人の謝冰心（中国の女性作家）と夫の呉景藻（ハーヴァード大学を卒業した社会学者，敗戦直後から国民党政権の駐日中国代表団の文化担当官として麻布に暮らしていた）が新中国に帰国（後年鶴見は北京で謝冰心と再会）」のなかのハーヴァード大学は誤記であり，正しくはコロンビア大学である。

㉒ 袁方主編，1999 年，前掲書，pp. 159–160。以下，呉文藻の略歴は本書 pp. 148–163 によった。

㉓ 袁方主編，1999 年，同上書，p. 147。

㉔ 袁方主編，1999 年，同上書，p. 159。

㉕ 袁方主編，1999 年，同上書，p. 159。

㉖ 鄭杭生・李迎生著，2000 年，中国社会学史新編，高等教育出版社，p. 137。

㉗ 費孝通は呉景藻が中国語で講義したのに驚いたというが，これも呉が考える社会学科の中国化の一歩であった。呉はいう。一万といえば中国人の誰もがわかるのに，十個千という必要はない，さらにましてや中国の古典や慣習的な用語の使用においてはなおさらのことである（袁方主編，1999 年，前掲書，北京出版社，p. 151）。

㉘ 呉文藻，1982 年，呉文藻自伝，晋陽学刊，第 6 期。但し，ここでは楊雅彬・王康，1991 年，前掲論文，pp. 489–497 から転載。

㉙ 呉文藻，1982 年，同上論文。但し，ここでは楊雅彬，1987 年，中国社会学史，山東人民出版社，p. 261 から転載。

㉚ 呉文藻，1936 年，社区的意義与社区研究的近今趨勢，中国社会学社，社会学刊，第 5 巻第 1 期，pp. 19。

㉛ 楊雅彬，1987 年，前掲書，山東人民出版社，pp. 262–263 及び袁方主編，1999 年，前掲書，北京出版社，p. 161–162 から再引用。

㉜ ラドクリフ-ブラウン（講演），呉文藻訳，1936 年，対於中国郷村生活社会学調査的建議，燕京大学社会学部，社会学界，第 9 巻，pp. 79–88。

㉝ 呉文藻，1936 年，中国社区研究計画的商榷，中国社会学社，社会学刊，第 5 巻第 2 期，pp. 55–66。

㉞ 呉文藻，1936 年，同上論文，pp. 61。

[追記] 本稿は佛教大学の 2002 年度特別研究助成（課題：解放前の中国における社会学の本土化について）の研究成果の一部である。

（ほし　あきら　社会学科）

2002 年 10 月 16 日受理